

**創作ダンス指導法**  
**「つながる・くぐる」 作品づくりから発表まで**

熊谷佳代 (岐阜大学)

## 1. はじめに

本ワークショップで行った「つながる・くぐる」は、高知大学名誉教授の山田敦子氏のワークショップ「くぐる」がベースにあり、創作ダンスの教材として考案されたものである。山田氏は筆者の学生時代の恩師であり、許可を得て改編している。

この教材は、岐阜大学教育学部専門科目「ダンス」、岐阜大学附属中学校1年生男子「創作ダンス」の授業において実践し、また、岐阜県教員対象の実技研修会においても実践した。1コマ完結型の授業として提案している。

以下、ワークショップの報告を体育の授業構成（導入・展開・まとめの流れ）に沿って報告し、留意事項を記すこととした。

なお、本ワークショップを通してつくられたダンスは、その直後に始まる舞踊作品発表会のプログラムにおいて発表された。

## 2. ワークショップの内容と留意点

### ○ねらい

多様なくぐるもの「つながる」とくぐり方「くぐる」を、仲間と協力して見つけ、感じ合って動く。

### I. 導入

①1人でくぐるもの「つながる」をつくる。  
手と手で、手と足で、手と床で、それを体の前や後ろ、左右でつくる。例えば、右手と左手をつないで体の前に輪をつくる→その輪を上にも下に、右にも左にも、場所を変えるなど。

②近くにいた人がつくった「つながる」をくぐれそうだったら「くぐる」。くぐり方の工夫もする。足から、手から、頭から、どんな部位からくぐれるか試してみる。

③2人組をつくり、つながってくぐるもの「つながる」をつくる。仲間の動きを真似してみる。

④次々にペアを変えて（ペアを探すときの移動は歩いたり走ったり、スキップしたり、回ってみた

りして）、「つながる」をつくる。

⑤どこかのペアがつくった「つながる」をくぐっても良い。

### 留意点

ここまでの過程で、体と心がほぐれていること、そして、本授業で取り上げる動きを全員が体験しておくこと大切である。①の活動は教師と一緒に1人で行う活動。教師の動きを真似しながら、いろいろな動きを体験させる。1つの動きのアレンジ（工夫）の仕方も伝える。②は①の活動を行いながら、仲間と行う活動。徐々に仲間との関係を促し、③④の活動へ積極的に取り組めるよう、様子を見ながら進行していく。⑤では、「つながる」のか「くぐる」のか自身で判断して、即興的に仲間と関わって動けるように促す。

### II. 展開

4人組（ABCD）で「つながる・くぐる」（くぐるものとくぐり方）を工夫してくひとまとまりの動きをつくる。

⑥4人組をつくり、ABCDを確認する。

⑦3人が「つながる」1人がそれを「くぐる」を4パターンつくる。この時、どんなイメージがしたか、どんなイメージで動けそうかを感じながら行う。

⑧構成の手掛かり（流れ）を与える。流れを大まかにざっくり動いてみる。

<はじめ> 「つながる」シーン

・走る-回る→2人（AとB、CとD）が「つながる」  
・走る-回る→2人（AとC、BとD）が「つながる」

<なか> 「つながる・くぐる」シーン

・走る-回る→3人（BCD）が「つながる」1人（A）が「くぐる」→離れて-転がる（這う）

・走る-回る→3人（ACD）の「つながる」と1人（B）の「くぐる」・・・同様に繰り返す。

<おわり> その場に残るか去るか、どんな動きでどんな状態で終わりたいか、自分達で決める。

⑨イメージが決まったら、それに合わせて動きを修正し、始まり方と終わり方を決める。可能であればタイトルをつける。

⑩仲間と感じ合いながら、踊りの練習をする。

### 留意点

ここで、学習者が創作ダンスの授業に意欲的に取り組める工夫や手立てを考えたい。本ワークショップの受講生はダンスや体育を専門とし、非常に意欲的に取り組んでいただけたので、大変スムーズに進行したと記憶している。

児童生徒（大学生）が創作ダンスに対して意欲的に取り組めない理由や背景には、大きく3つの要素があると考えている。1つ目は苦手意識、2つ目は抵抗感、3つ目は羞恥心である。

苦手意識は嫌い・つまらないものという意識に変換されやすい。嫌いを好きに、つまらないものを楽しい・面白いものにするためには導入の工夫が必要である。筆者は、学習者が興味を示しそうなことや夢中になってしまう遊びの要素やゲーム感覚を取り入れながら、でも本題を外さないような導入を心がけている。

抵抗感は学習のねらいや意味が不明瞭なことに起因し、学習者は何をすべきかわからないと停滞してしまうことが多いと感じている。何をすべきか、すべきことをはっきりさせることで学習者の戸惑いを取り除きたい。何の手掛かりも与えないまま「好きな動き」「自由な動き」を求めることは学習者を困惑させる。

学習者が安心して動ける状況や共通の枠組みを与えることが重要だと考える。そのためには「今日のひとまとまり」など構成の手掛かりを与えたり、「DKW（ダンス・キー・ワード）」を示したりしながら、学習者のやるべきことや目指すべきことを示すようにしている。共通の枠組みのなかで「他に出来ることはない？」「もっといい方法は？」と学習者の創意工夫を求めている。

羞恥心は自意識の問題であり、「恥ずかしい」と感じるのは自分の問題である。「動きがうまく出来ない」「かっこ悪い」「他人と違う」と自分が感じることで生じてしまう意識である。出来ないことや違うことは、決して恥ずかしいことではない「みんなちがってみんないい」ことを理解するには時間がかかることもあるが、まずは、誰もが「出来る

動き」「知っている動き」から始める。または、先生と一緒に同じ動きをすることで、学習者が安心して動ける状況をつくるのが大事である。

### III. まとめ

<ひとまとまりの動き>の表現

通常の授業形態においては、1グループずつ発表したり、交流したりする。

本ワークショップでは、直後に始まる舞踊作品発表会のプログラムにおいてワークショップショーイングとして発表した。

### 3. ワークショップショーイング

ワークショップ後は場所を変え、発表会の会場である小ホールでショーイングのリハーサルを行った。参加者が50名を越したことから、全体を2つに分け、2曲使用し、どちらの曲で踊りたいか選曲させた。ほどよく半々に分かれたので、前半と後半でスタンバイ位置を確認し、実際のステージ上で4人組が次々に踊りを試みた。踊る順番や場所は参加者（ダンサー）の判断に委ねた。講師である筆者は、4人の関係性が見えることと、空間構成だけを心がけて全体をコーディネートした。

本番では、教材「つながる・くぐる」がダンス作品として立ち上がったことに感動した。

### 4. おわりに

本ワークショップにおいて求めた動き「つながる」「くぐる」は、特別に難しい動きではない。誰でも出来る。だからこそいろいろな工夫が可能になる。そして、1人で頑張る必要がない。また、1人では出来ない動きが仲間と行うことで出来て、動きの可能性が生まれ広がっていく。そこには互いの関係性も成立し、豊かな表現の世界が生まれる。本教材の魅力はここにあると感じている。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださいました主管校の細川先生と舞台関係者の皆さま、そしてワークショップ参加者の皆さまの素晴らしい感性とダンス愛に対して、心から感謝申し上げます。